

るという立場に立っている。「森林は水の消費者」という主張である。

日本における森林水源涵渇論は、明治四〇年代頃から、保安林の拡大と「禿耕地」（ハゲ山）や採草地の成林化に伴って、瀬戸内海沿岸の乾燥・少雨地域の農民たちの現場認識から広がっていった。とくに大正二年の瀬戸内海沿岸部に発生した早魃を契機に、数多くの溜池の貯水量が減少し、農民たちは、早魃の原因が保安林の拡大と「ハゲ山」や「採草地」への植林によって水源が涸れたためであると主張し、大規模な保安林の解除要求を行う事態になる。岡山県では大正二年から昭和十二年まで県議会においてこの問題が議論され、公的に「森林水源涵渇論」は認識されるようになったが、「水の消費者としての森林」が瀬戸内海沿岸の様な乾燥少雨地域では、「溜池の貯水量」を減少させ、早魃を惹起し易くなるという点を現場の経験的観察から理論化したのが岡山県の山林技師山本徳三郎（一八八六—一九四五）であった。

彼は、こうして日本における「森林水源涵渇論」を定式化すると同時に、岡山県下のみならず、乾燥少雨の瀬戸内海沿岸地域、

あるいは内陸部に卓越する「ハゲ山」や「草地」が溜池の貯水を確保するために、近代以前から農民の間で、こうした「ハゲ山」や「草地」に樹木を植えさせない慣行が存在して来たことを発見していったのである。

「森林増雨作用論」を理論的根拠として植林や保安林の拡大を企図する岡山県山林課や農商務省（農林省）と「無立木地」（ハゲ山や草地）を維持し、溜池の水を確保しようとする農民の対立は、大正十三年の早魃時に、農民による森林への放火事件（岡山県で四〇〇件以上）へと発展する。

こうした森林をめぐる対立は、理論的には、森林水源涵渇論に依拠する山本徳三郎と農林省の立場を背景とする平田徳太郎（一八八〇—一九六〇）の「森林水源涵養論」との論争を引き起し、その結果、昭和十一年に日本で最初の水源涵養の実験施設、「竜の口山水源涵養試験場」が岡山市北方に設けられた。その試験の結果（第一回報告「一九四二年」）第五回報告（「一九六〇年」）、山本の定式化した森林水源涵渇論は、乾燥地域や早魃に際しては理論的根拠を持つことが実験的にも証明され、一九七〇年

代になって承認されるようになったのである。

それはまた他方で、近世期以降の日本における「無立木地」（ハゲ山や草地）が、ある意味で積極的に農民たちによって維持され、管理されてきたことの根拠を説明するものともなった。それは、「ハゲ山」が農民たちによって積極的に管理されてきた「文化景観」ともいえる側面に光をあてるものである。

この森林水源涵渇論は、決して森林水源涵養論を否定するものではないが、私たちの従来から抱いてきた「森林神話」の一部を解きほぐす契機とはなり得るものである。

## 二〇〇六年度

### 史学研究会大会・総会の記録

史学研究会の二〇〇六年度大会・総会は、一月二日（木）一三時から一七時まで、京都大学文学部新館において開催された。

総会では、金田章裕理事長による挨拶の後、杉橋隆夫氏を司会に選出して、庶務・編集・会計・広報に関する報告・審議がな

された。

庶務（田中和子常務理事）からは、会則の変更（理事の人数を二五から三五に変更、庶務委員の設置について記載を追加）について提案があり、承認された。会員数・史林送付数の動向、役員の交代、名簿の発行・発送、事務局の刷新などについて報告があった。また、二〇〇七年四月二一日（土）の例会開催（テーマ「モニュメント」が案内された。

編集（杉山正明常務理事）からは、『史林』が順調に刊行されていること、二〇〇六年四月に開催された「国境」をテーマとしたシンポジウム形式の例会の発表と討論が九〇巻一号の特集号にまとめられる予定であることが報告された。

会計（吉川真司常務理事）からは、二〇〇五年度決算報告、および二〇〇六年度予算案が提案され、拍手で承認された。

広報については、吉井秀夫常務理事（海外出張中）に代わり、吉川真司常務理事から、ホームページの運用や例会・大会ポスターの作成・発送について報告があった。これに引きつづき、公開講演が行われた。講演は次の二本であった。

服部 良久氏

「中・近世農村社会における紛争と紛争解決——日・欧の比較——」

久武 哲也氏

「環境史研究と歴史地理学

——森林水源涵潤論をめぐって——」

講演者紹介と討論司会は、南川高志理事と金田章裕理事長がつとめた。講演内容は本号に掲載されているが、ともに斬新な着眼による意欲的な研究報告であった。聴衆の関心も高く、討論が活発に行なわれた。

公開講演ののち、泉拓良理事が閉会の辞を述べた。大会終了後、今年度からの企画として、オープンな立食形式の懇親会が開かれ、学生・院生を含む大勢の会員の参加があった。

（文責・田中和子）

## 受贈誌

（二〇〇六年六月二十九日）  
二〇〇七年一月九日）

神道宗教（神道宗教学会）二〇一―二〇二

人文学報（京都大学人文科学研究所）九

三

人文研究（小樽商科大学）一一二

人文地理（人文地理学会）五八一五

成大歴史学報（国立成功大学歴史学系）三

〇

政治経済史学（日本政治経済史学研究所）

四七三―四八四

摂大人文学科（摂南大学外国語学部）一四

専修史学（専修大学歴史学会）四一

中央研究院 歴史語言研究所集刊（中央研

究院歴史語言研究所）七七―一二四

長野県立歴史館たより（長野県立歴史館）

四八―四九

東方學報（京都大学人文科学研究所）京都

七八

東方學會報（東方学会）九一

東洋史研究（東洋史研究会）六五―二

東洋學報（東洋文庫）八七―四―八八―三